

取組実績の概要 【2ページ以内】

岡山大学、および吉林大学、成均館大学校は、5年間を通じて、学部から大学院に至るまでの指導を縦軸に、また、文系から自然系、医歯薬系までを含む全学体制を横軸に、幅広いキャンパス・アジア活動を展開してきた。その中で、とりわけ大きな実績として特記できるのは、次の4点である。

(1) 3国教育連携システムの構築

日中韓の政治的関係が厳しい中、3国間の教育似における信頼関係の醸成と連携システムの構築ができたことは大きな成果である。岡山大学、吉林大学、成均館大学では、それぞれキャンパス・アジア事務局が各大学の活動を企画・実施してきた。3校間では、日常的にメール、電話等で緊密に連絡を取りながら、連携して事業を推進してきた。また、定期的に(年に1〜2回)事務局会議を行い、それぞれの成果と課題を報告し合うとともに、プログラムの共同実施、相互調整、相互チェック、単位互換制度の確立などについて協議を行ってきた。また、不定期で3校代表者会議等を開催し、日中韓3校教育・研究連携について協議を行ってきた。

岡山大学では、全学でプログラムを企画・実施できる体制を構築してきた。各部署の副研究科長またはそれに相当する代表によるキャンパス・アジア事業推進委員会を最高意思決定機関とし、日常的な運営は実際に活動を担当している部局教員、キャンパス・アジア事務局スタッフによるプロジェクトチーム会議がこれを担当してきた。さらに、プロジェクトチーム会議の下に様々なワーキンググループがあり、学生支援、語学教育推進、共通善教育、共通教務システク開発、ジョイントディグリー制度設計などを専門に担当した。こうした活動を、専任スタッフを配置したキャンパス・アジア事務局が統括した。

事務局体制だけでなく、PT会議など、幅広い教員がこの事業に参加するシステムを構築したことにより、プログラムの運営だけでなく、3校の教員間の信頼関係や連携を構築することが可能となった(添付の総括成果報告書、pp. 8-9参照)。

(2) 高いモビリティの実現と地域中核人材(アジアクラット)の育成

このプログラムでは、高いモビリティを実現した。562名の留学生在が長・短期で日中韓を移動しながら学んだ(岡山大学における吉林大学・成均館大学との受入・派遣)。また、中韓の交流(吉林大学・成均館大学間交流)も含めると、600名以上の学生がこの3校のプログラムに参加している。さらに、キャンパス・アジアの様々なプログラムには、学生だけで延べ約1,200人が参加した。

このほか、学内キャンパス・アジアプログラムへの参加者、独自講義の受講者、学生が自主的に組織したキャンパス・アジアクラブ、キャンパス・アジア同窓会、キャンパス・アジア学生新聞編集グループなどへの参加者、などを加えると、キャンパス・アジア事業の極めて広い裾野が形成されたといえる。

また、こうした教育と留学の成果として、多くのキャンパス・アジア留学生在が公務員、大学院進学などの道を選び、プログラムが目的とする地域中核人材(アジアクラット)が育ちつつある(添付の総括成果報告書、pp. 55-56参照)。

(3) 「東アジア型グローバル教養教育システム」の構築

このプログラムでは、東アジアの人材育成にとって必要なカリキュラムを、3国で試行錯誤しながら構成してきた。東アジアのグローバル人材にとって欠かせない教養とは何か、相互理解を促進するための基礎教育とは何か、東アジアのアイデンティティはどのように形成できるのか、などを3校で徹底討論しながら、現在のカリキュラム構成を練り上げた。

具体的には、これまで様々な実験授業を立ち上げ、効果的な国際共同教育システムの構築を目指してきたが、最終的に「東アジア型グローバル教養教育システム」という体系にこれまでの試みが集約された。この体系の中で、とりわけ中国・吉林大学では歴史・伝統教育を、韓国・成均館大学校では伝統・思想教育を、日本・岡山大学では共通善・現代東アジア学を分担して教育してきた。また、幅広い分野の履修科目が認定され相互単位互換ができるシステム、また短期留学においても単位が付与できるシステムを構築してきた。さらに、最高水準の語学習得システムを構築してきた。岡山大学においては、学部・大学院と連続するキャンパス・アジア教育制度、それぞれの分野に適した教育プログラムの開発、全学に共通した共通善教育プログラムを開発してきた。吉林大学においては、キャンパス・アジアのための独自の授業やプログラムを開発してきた。成均館大学校においては、このプログラムの基礎となる東アジア伝統・思想の集中的な講座に加え、フィールドワークを含むアクティブ・ラーニングを開発してきた。各校が独自のプログラムを構成することにより、それぞれの大学に留学するメリットが高まり、また共通プログラムで協力することにより、教員同士の信頼関係の醸成がなされ、また将来の共通教育(ジョイントディグリーをベースとした国際共同大学院)の基礎が形成された。

岡山大学の特徴的な授業としては、マルチリンガル教育(多言語共通善教育セミナー、学生フォーラム、ワークショップ)、アクティブ・ラーニング(リージョナル・カンファレンス、まちなかキャンパス、中韓ワークショップ)、生活全般を通じた教育(シェアハウス、キャンパス・アジア学生クラブ)などをあげることができる。また、サマースクール、短期語学セミナー、中韓ワークショップ、共通教科書編纂、共通善講演会の実施、ナノバイオコースなども、「東アジア型グローバル教養教育システム」として全体の教育体系に有機的に統合した。

現在、学部生に対しては共通善教育、語学教育とグローバル教養教育を中心にメニューを組んでいる。大学院生に対しては、個別の関心と修士論

文、博士論文のテーマに即した指導体制をとっている。

(4) 丁寧な個別指導体制と学生の自主的活動のサポート

人材育成においては、長期留学の学生に対する事前指導、長期留学後のスキルアップ指導（ディスカッションを中心とした多言語セミナーの開発、スキルアップ語学指導の継続、学生独自のイニシアティブによるキャンパス・アジア活動の支援、等々）をはじめ、大学生活を通じて継続的にキャンパス・アジアプログラムに参加するシステムを構築し、長期的な視野に立った人材育成を行ってきた。

学生支援の面においては、3校の事務局が連携をとり、学生の研究・教育支援を推進してきた。

派遣学生に対しては、Skypeを通じて定期的に面談を行うほか、マンスリーレポートを義務付けて学生の生活やプログラムの進展状況を把握している。

また、シェアハウスの運営を通じ、相互サポートを推進し相互理解を育んでいる。シェアハウスの目的は、日中韓の学生たちが生活を共にし、お互いの生活習慣や文化、価値観を相互に理解することを基礎に、本音で議論しあえる人間関係を築くことである。シェアハウスは、そこに住んでいない学生の交流の場にもなっており、大きな教育効果を上げているといえる。

また、学生の自主性を重視したサポート体制を構築した。具体的には、キャンパス・アジア同窓会、キャンパス・アジアクラブ、キャンパス・アジア学生新聞の刊行などの活動を通じたサポート体制の強化である。これらの活動は、すべて学生たちのイニシアティブで運営されている。キャンパス・アジア同窓会は、キャンパス・アジアプログラムで仲間となった学生・院生たちが、卒業後も連絡を取り合いながら東アジア地域中核人材として活躍し、情報を交換する場である。新しいキャンパス・アジアプログラム生のサポートも行っている。キャンパス・アジアクラブは、キャンパス・アジア学生の支援、キャンパス・アジアプログラムの広報、大学・地域イベントへの参加などを行っている。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

| | 平成23年度 | | 平成24年度 | | 平成25年度 | | 平成26年度 | | 平成27年度 | | 合 計 | |
|-----|--------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|-----|------|------|
| | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| 計画※ | 0人 | 0人 | 69人 | 67人 | 69人 | 67人 | 69人 | 67人 | 69人 | 67人 | 276人 | 268人 |
| 実績 | 19人 | 12人 | 81人 | 33人 | 79人 | 86人 | 96人 | 50人 | 47人 | 59人 | 322人 | 240人 |

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。